



コープの指定産地米

産地訪問紀行 vol.1

JJAにいがた南蒲 CO・OP 新潟コシヒカリ

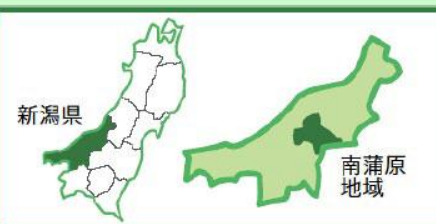
7月5日(火)、コープの指定産地米CO・OP新潟コシヒカリの産地を、組合員2名が訪問しました(コープかながわ竹森恵子さん、淵野アヤ子さん)。

現地ではJAにいがた南蒲の清水さんと生産者の1人、安達幸(あだちおさむ)さんから、農業と化学肥料を減らした米作りの工夫やお米の流通にわたるまでの幅広い話をお伺いすることができました。また収穫した米を保管する「いちいカントリーエレベーター」では、もみが持ち込まれてから検査、乾燥、選別などの工程を見学しました。

《CO・OP 新潟コシヒカリの産地情報》

CO・OP 新潟コシヒカリのふるさは新潟県の南蒲原地域。米どころ新潟の中でも有数のお米の産地です。

南蒲原は越後平野の南部から福島県に及ぶ、平坦な田園地帯と自然豊かな山々からなる地域で、県のほぼ中央に位置していることから「越後のへそ」と呼ばれることもあるそうです。



一帯は、信濃川をはじめ福島県境を源流とする刈谷田川、五十嵐川、加茂川などの河川に囲まれており、山々から流れる豊富な雪解け水のおかげで水田は豊かに潤っています。

おいしさと確かな品質、そして環境に配慮した米作りを実践中！

JAにいがた南蒲では、おいしい品質のよいお米を消費者の皆さんに安心して召し上がっていただけるよう、平成20年度のコシヒカリから農業・化学肥料の削減栽培を開始しました。JAにいがた南蒲米穀課長 清水正弘さん現在取り扱うお米の約95%が地域の慣行栽培よりも農業と化学肥料を3割または5割削減して栽培したものです。今後は全ての米を3割削減米へ移行させると共に、5割削減米をさらに拡大するよう努力を重ねて参ります。



JAにいがた南蒲米穀課長 清水正弘さん



お米の生産者数 4993人
コシヒカリについて(平成22年度)
◆作付面積…5623ヘクタール
◆生産量…3万6000トン

◆コシヒカリのほか「こしいぶき」なども栽培

除草剤を使わずに、あぜの雑草繁殖を抑える ～ヒメイワダレソウの活用～

田んぼのあぜにカバープランツとしてヒメイワダレソウを植えていきます。14年前に農協から「試験栽培をしてはどうか」という話があり引き受けました。最初の2年くらいは手作業で雑草を抜くなど苦労しましたが、4年目にはあぜ全体をカバーすることができ、雑草の繁殖を抑えることができました。



生産者の安達幸(あだち おさむ)さん



あぜを覆うヒメイワダレソウ 小さな花が咲いていました。

ヒメイワダレソウは、雑草の繁殖を防ぐだけでなく、実が実らないのでカメムシなどの昆虫が寄ってこないですね。カメムシは雑草の種に寄ってくるのでカメムシ対策にもなるんですって。(竹森恵子さん)



ヒメイワダレソウのつるの茎が土を覆うので、あぜの土が崩れるのも防止するんですね。ちょうど今朝、雨がだいぶ降ったんですが、安達さんの田んぼでは水がそれほど濁っていないんですよ。(淵野アヤ子さん)

米の作り方は、年ごとに違います ～安達さんは、今年で61回目の米づくり～

米作りは毎年同じようにはできません。昨年は9月の猛暑が厳しく、夜の9時でも30度を超える暑さでイネも眠ることができませんでした。高温対策は水管理です。田んぼの水を入れ替えて温度の低い水を入れてやればよいのですが、取水権の問題があり十分に水を使うことができません。困りました。

このあたりは、もとは蒲(がま)の原だった土地です。掘り返せば蒲が出てきます。粘土分が多く田んぼの中での作業はしにくいですが、肥料・栄養を蓄える土です。土をうまく生かす技術があればいい米が作れます。



<産地訪問を終えて>

資料やお米の袋に書かれている内容だけではわからない、生産者の方の苦労をお聞きすることができました。単に農業を半減するだけでなく、半減したためにヒメイワダレソウを植えて雑草の繁殖を管理していることなど、現場に行かないとわからないことがあるんですね。(竹森恵子さん)

生産者、農協の方々、施設の方々、皆さん「おいしくて売れるお米づくり」にとっても情熱を持って取り組まれていることに感心しました。(淵野アヤ子さん)

